

願う思想が示されながら、説話の中に、そのことが衆生を説きすすめ
る方便とはほとんどなっていない。それは、靈異記の書名の表わす思想に
拠るところでもあろう。さらに、その時代の民衆思想を反映していること
でもあろう。死によって、あるいは死を意識することによって、信仰への
芽生えも、さらに説話生成の基盤も胚胎した。その信仰と説話生成の芽生
えを育成し、完成せしめたのは、ほかならぬ仏教教団とその布教活動であ
ったといえよう。その時代、その文化であったともいいかえ得よう。

死を託する歌

——「過ぎにし(人)」——

町 方 和 夫

「古代文学における死と文学」というテーマのもとで、死が万葉人とのど
ようなかわりあいをするかの一面を提示することが私の責任であった。

まず、死と生とを対置して、抽象的客体としてとらえるか、それとも生
と死とを同位性の異体としての抽象的主体としてとらえるかである。つま
り、文学にあらわれた死をとらえるのか、それとも死が意識の世界の中で
文学としてどのように形成されていくのかの選択であって、私は後者をえ
らんだ。

万葉集において死の直接表現としての「死」は七十六首と憶良の詩文二
篇にみられる。それを形式的に形態を整理してみると、①「死なましも
を」(物事の成就しない場合には死を選択したるうに、という決意を追
思念の中で逆説表現したもの)、②「死なば死ぬとも」(現実の状況の中
で自己の非力を想念上の彼岸の客観世界に對置して充足感を見出だそうと
するもの)、③「生るれば死ぬ」(「死ぬべし・死なむ」とともに必然的帰
結の世界観に自己を放擲して、現実世界に沈潜しようとするもの)、④「恋
ひて死ぬとも」(生者の強烈な心情を現実世界にひきついで永遠の理想世

界を想定したロマンチズムのもの)の四類に基本的に大別しようと考
えるが、本質的には生をうたうために生の延長線上に設定した客観世界とし
ての「死」でありながら、空間的には位置の不明確な世界であって、田中
元氏のいわれる時間の連続の中にならぬ不明確な姿の世界といふこと
になる。

万葉集における「死」の直接表現は、巻四・十一・十二の三巻に圧倒的
に多く、計四十九首、ついで巻十五・十六でそれぞれ六首であって、他の
巻は僅少である。憶良の詩文二篇を含めて七十八首を歌の内容から分類し
てみると、当然多くあってよいはずの挽歌にはわずかに三首、病床歌(詩
文を含めて)四首、無常歌二首であって、「死」は正述心緒、寄物陳思の
歌に多い。ということとは、「死」は実際の死とは無縁に近いのが万葉集の
表現の世界であることを意味するのだろう。歌の本来性が挽歌においては
死を穢れの世界として忌嫌する意識となって死の直接表現を回避する傾向
にあったのであり、正述心緒寄物陳思の部では死は決意なりロマンチズ
ムなりを強調するための説明的比喩表現の素材であったから、「死」は挽
歌性の悲哀慟哭の感じはなく、情感表現の語であるといえる。

それでは、「死」の直接表現のすくない巻一・二・三などではどうあら
われてくるかというと、「死」は(崩・薨・墓・殯宮・葬)を含めて)巻
二・三の題詞や左注に多く、巻九の題詞に若干みる程度である。巻四には
ただ一例のみである。これは題詞左注の有無が歌巻の性格によってことな
るから用例数で云々すべきではないが、一応数字的には題詞左注のなかの
「死」の直接表現と歌の中の表現語としての「死」は反比例している。こ
れは、巻二・三においては、「死」は純然たる説明的叙述語の傾向にある
のだろう。抒情世界の語としてはふさわしくなかったのだろう。

これは、巻三までの死の世界と巻七・九の古代的思考の傾向の強い抒情
の世界は、死を死として別個の客観世界としてとらえるのではなく、田中
元氏が時間の領域を超えた「救い」を求め(2)る宗教性をのべておられるが、

詠唱者の意識は死を現実の生の世界の延長として自己ないし他者を生存せしめる形態をとり、時間を非現実の世界に延長することによって、死者の生を生者自身の心奥によみがえらせて、安隠にすることを文学的と認識していたと考える。だからこそ、巻一・二・三・七・九の死を託する歌は誅の性格を負うものだと感得する。久松潜一氏は、死は生活の終結として人間に深い感動を与え⁽³⁾ると言っておられるが、亀井勝一郎氏は「古代人は、死と死骸というものを潔癖に区別していたらしい。」⁽⁴⁾とっておられるように、死というものは死骸とか墳丘とかを通じて観念的に事実化されて存在するのであって、死自体が存在するわけではない。死は常に認識の世界で生者の本質的に忌嫌する対象として生者の心奥に内在するものであるから、死喪の歌の詠唱者は時間の連続としての動態ばかりでなく、等価的、同列的に死者の世界に接近し、死者の生を生者の世界に確立する意味での動態をも創造する。

ところが、巻四以下に多い「死」の直接表現は死を現実外の抽象世界としておりながらも死骸・墳丘を対象とはしておらず、死と生、死と恋とを時間の延長におき、生や恋の絶対的価値を表明しようとする。つまり、技術的に主観的美化の心境表現として「死」を活用しているにすぎない。表層的には詠唱者は死を鑽仰しているかに見えて、実は他者に対して自己の生の希求、恋の成就の熱望を自己顕示して文学的效果を高めようとしているにすぎない。この「死」の直接表現が潜在化して無常観と融合してしまふと、千歳不変の恒久性を願望し、自己を微小な存在とする「水沫^{みなわ}なす^{もよ}き命も^な縋^な繩の千尋にもがと願ひ暮しつ」(巻五の九〇二番)や巻二十の四四七〇番がうまれてくる。もはや自己顕示どころか、逆に仏法、自然の摂理の中に自己を埋没させてしまふ結果になって、後代に継承されていくことになる。

万葉集の死の間接表現はどうかというと、雲隠り過ぎにし人⁽⁶⁾などがありまた水鳥を死の世界の導者とみなす死を託する歌もある。特異な表現では、

直接表現にもっとも近距離にある「灰にてませば」(巻二の二二三番、人麿)がある。葬制の変化による火葬の普及と関連づけられるが、死骸を穢きものとして焼却する、形あるもの霊あるものを無に帰してしまうことは、クーランジのいう霊の生存から考えておそろしいことである。「雲隠る」が火葬の煙の美化表現で死者の霊のただよい動く姿であるのに対して「灰にてませば」は死者のなれの果て、とるにたらない一握り灰、ただの物質が地上に残るのである。新しがり屋の人麿はあえてそれを取り入れたのであろうか。人麿の妻の死は何ものをもおそれない衝撃を人麿に与えたのだ。人麿にとってはいっさいの時間が停止するぐらいの衝撃であったのだろう。この表現は二度とは使用しなかった。

「雲隠る」や水鳥を死界への導者とする思考を垂直的他界観に水平的他界観を交えたものとするならば、「過ぎにし(人)」は生の時間を延長した隣接の水平的他界観であろう。

真草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とぞ来し

巻一の四十七番

……悔しみか 念ひ恋ふらむ 時ならず 過ぎにし子らが 朝露の如

巻二の二一七番

夕霧の如

をはじめ、巻三の四二七番、四六三番、巻七の二一九番、二二六八番、一四〇九番(「入りにし妹」)、一四一〇番、巻九の一七九六番、一七七七番、巻十の二二九七番(「過ぎかてぬ兄」)、巻十三の三三三三番(「散り過ぎにきと君が正香を」)である。三三四四番(「過ぎていにきと玉梓の使」)は巻二の二〇七番「柿本朝臣人麿、妻死りし後、泣血哀慟して作る歌」に類句があるから二首とも加えたい。また、巻十二の二九二七番の「過ぎにし恋い」の「恋い」は抽象的恋情ではなく、「死んだ恋人」を対象とした具象的恋情と考えて加えてよいだろう。以上十五首である。

これら十五首中五首は人麿または人麿歌集であり、巻三の四六三番は家持作である。部立の面で見ると、七首は挽歌であり、部外の歌にしても四

十七番、二九二七番等は挽歌系である。瀬古確氏は四十七番を含む短歌群四首を二分して時間的推移とみておられる。人麿は軽皇子に扈從して草壁の皇子をしのび、挽歌表現語として「過ぎにし君」を創造したのだろう。

卷二の二一七番の「過ぎにし子らが」の歌の短歌二一八番「罷道」について、沢瀉久孝氏は葬列の道ではなくあの世への道であるとのべておられる。しかし、「川瀬の道」に直接連なる同格語であるから事実上は葬列の通過する道であろうが、生者の世界の時間の延長に存在する死者の生の行きつく無限時間の世界に通ずる道であろうと私は考える。この無限時間の思考は一九九番高市皇子殯宮歌の「万代に過ぎむと思へや」が発想の根底をなしていると考える。この「過ぎにし子らが」「川瀬の道」は虫麿の河内の大橋の歌の「い渡らす児」に展開されていったと考える。

また、「過ぎにし」に「黄葉」を冠する歌が多いのは風雅を対象としたばかりでなく、中国的古代感覚「丹楓染涙」を受用した悲傷性を内在せしめた特殊表現であることは、卷六の一〇四四番「寧楽の京の荒れたる墟を傷み惜しみて作る歌」の「紅に深く染みにし情かも寧楽の京師に年の経ぬべき」にその感覚を認めえよう。そうすれば、卷三の四五九番犬養宿祢人上の歌「見れと飽かず座しし君が黄葉の移りい去けば悲しくもあるか」もこの「過ぎにし(人)」系に加えてよい歌である。

こうして、人麿の新造表現語「過ぎにし(人)」は人麿を歌聖と仰ぎ傾倒したごく少数の歌人に継承されたにすぎず、死の世界が生の世界の対極となり、「死」の直接表現が一般化してくると同時に、一方において「黄葉」が風雅の対象として不動の地位を確保するにつれて、「過ぎにし(人)」系は万葉歌園の死を託する歌から従容然と消滅して、爾後の歌園に再び姿を見せなくなってしまうのである。言うなれば、みずからがみずからの使命「過ぎにし」を体現せざるを得なかった薄倅の児であった。

注1 「古代日本人の世界」——仏教受容の問題。

2 前書。

3 「万葉集における生活感情」(国文学九卷四号、昭和三十九年三月号)

4 「古代智識階級の形成」(日本人の精神史研究)——死と死後の行方——

5 「万葉集のリズムとイメージ」(中西進氏・万葉集研究第三集)——「意味とリズム」——で土居光知氏の動態をとりあげ、「叙述に時間の経過があるということになる」という。

6 「万葉集歌素材観——家をめぐって」(拙稿、日本私学教育研究所紀要10号)

7 「古代家族」(第一部第一章「霊及び死に関する信仰」)(中川善之助氏訳)

8 「死のうたの系譜」(安西均氏・国文学十五卷四号、昭和四十五年三月号)

9 「葬送儀礼と他界観念」(上田正昭氏、解釈と鑑賞四三七号、昭和四十五年七月号)

10 「万葉の形式」(和歌文学講座二)——連作の妙味——

11 「万葉歌人の誕生」——万葉の虚実。「古代文学にみる靈魂観」(大久間喜一郎氏、明治大学和泉校舎研究室紀要22・昭和三十八年三月)——靈魂の行方——では遺骸埋葬の場を山奥荒磯であったために信仰の場となったとする。

12 注5の中西氏論文。「空想的イメージ」では、「非現実世界を構築」という。

拙論、前掲論文。